

乙訓 文化

90号

2019年3月23日

発行・乙訓の文化遺産を守る会

目次

- 井ヶ田先生の思い出 高橋昌明
井ヶ田先生の思い出 浅田和成
脇田修先生 脇田晴子先生を悼む 京樂真帆子
湯浅克二さんの思い出 長谷川澄夫
〔書籍紹介〕三宅安兵衛遺志碑 馬部隆弘

井ヶ田先生の思い出

高橋昌明

井ヶ田良治先生が、二〇一八年五月一三日にお亡くなりになった。満九一歳と五カ月のご生涯である。ご逝去のことは、四十九日を終えた七月上旬、奥さまの弘子様から届いたお手紙ではじめて知り、深く動揺した。誤嚥から肺炎をおこして入院、一旦は肺炎の治療を終えて退院支援の病棟で嚥下訓練や、栄養の経口摂取のリハビリをしておられたが、小さい誤嚥をくり返し再び肺炎を発症され、重篤となって亡くなられたという。

筆者は、一九六三年に同志社大学文学部の文化史学専攻に入学した。先生は法学部で学部が違っていたが、全学の学生が参加する同志社大学歴史学研究会の顧問であられたので、そこで学生生活の大半を送った筆者は、一年生のときから、先生のご指導をうける。とくに、歴研が学生運動内の対立のとばっちりを受け、大学会館のサークルボックスから追い出され、たまり場の確保や運営に苦心したこともあり、ご心配をかけ通しだった。

その後、大学院修士課程を経て、一九六九年から同志社高校、一九七六年からは滋賀大学教育学部、一九九六年一〇月からは神戸大学文学部・大学院と職場は変わったが、いつも先生の的確なご指導に導かれながら、今日に至る。

修士論文を書いていたときなど、君のはシカゴ

のストリップだねといわれた。場末のストリップ小屋の呼び込みにスケベエ心をかき立てられ、一ドル、さらに一ドルと巻き上げられてゆく客を諭えに、問題設定は面白そうだが、思わせ振りの文章で答えを次々先送りし、肝心なことは何も論証されないままストンと終わり中身がない、と批評されたのである。思いだしても恥ずかしく、おかしいが、絶妙の批評というほかない。

同志社高校に在職していたときには、大学・女子大・併設諸校をふくめたオール同志社の教職員組合連合の執行委員や副委員長をやったこともあり、ご一緒する機会が多かった。組合の会議が終わったあと、四条河原町の焼き鳥屋にいったとき、ここは塩で焼いた「さんかく」がうまいのだ、と喋っておられたのが、妙に記憶に残る。長岡京市史編さんの時は大山崎に住んでおり、亡くなられた仲村研先生の代理として、中途から中世担当の専門委員になり、副委員長のち委員長になられた先生の指導の下に、ことにあたった。

先生は、旧制二高・京都帝国大学・同旧制大学院で学ばれたから、そもそも筆者などとは比べものにならないほど深い学識をそなえた学者であるのは当然だが、ある機会に大学の研究室を訪れたとき、イギリス留学時に購入された羊皮紙の古文書を読んでおられたので、いつラテン語を習われ

たのですかと質問すると、学生時代と、こともなげにいわれるのに驚かされた。

先生の学問的な関心の広さや研究に向かわれるときの柔軟な姿勢はどなたもご承知のことと思うが（その全体像は岩野英夫「聞書・わが国における法史学の歩み（二）——井ヶ田良治先生にお聞きする」『同志社法学』五五巻一号、二〇〇三年が便利）、法制史の比較研究、歴史学の国際交流にも関心を持たれ、大きな役割を果たされている。一九九〇年開催の第一七回国際歴史学界（スペイン・マドリード）では、河音能平氏が円卓会議のテーマである「マルコ・ポーロ時代の手稿史料一二五〇—一三三三」で「中世日本における軍忠状文書様式の成立」を報告され、日本中世史の研究者多数が参加した。これは、そもそも先生がイギリス・ダラム大学のブリットネル教授からの手紙で、円卓会議を成功させるため日本からの報告者の斡旋を求められたのを、河音氏に相談されたことにはじまる。この会議に先生ご自身は参加されなかつたが、参加者のために、ご実家である仙台「お茶の井ヶ田」ご自慢の、水で出せる緑茶のティーバックをもたせてくださった。

また河音報告の準備のために、一九八九年から関西の日・東・西の研究者を中心に比較古文書研究会がもたれ、その発展として翌年末から中世比

較史料研究会が一〇年にわたって開催されている（その内容については佐藤進一・井ヶ田良治「中世比較史料学をめざして」『歴史学研究』七四九号、二〇〇一年参照）。また河音氏が、御成敗式目の独訳・英訳を検討する会を呼びかけられ、それにドイツ法制史・日本法制史・日本中世史・法思想史学・ドイツ語学・日本語学・律令学に興味のある多様な人々が参加された。先生はそのどちらにも常連・中心メンバーとしてほぼ皆出席されている。

二〇〇九年に高齢者に多いパーキンソン病という脳神経系の難病を発症され、二〇一四年一月中旬から病勢の進行が顕著になったと聞く。今年三月中旬にたまたま長岡京市にいく用事があり、久しぶりに先生にお会いしたい、いまを措いてもう機会がないと強く思ったが、結局難しいご病氣だからご迷惑、と自分に言い聞かせた。案の定、二度とお会いすることが叶わなくなり、なぜもっと早くにと、悔やまれてならない。

ずっと以前から、健康にも十分すぎるほど注意をはらい、一九七四年ごろだったか、健康食品としてブームになった紅茶キノコを培養して、面白がっておられた時期もあった。スイミング・クラブなどにも通われて、千メートルを楽に泳がれたと聞くあの先生が、なぜ病に倒れたのかと不思議ですらある。大学院生のころ、ある長い会議の休

憩時間のおり、先生と二人で、背中合わせになつて交互に相手をおつかぐ「ぎっこんばったん」の体操をしたことがある。先生のお体が二十歳代前半の筆者より、ずっと柔軟なのに、びっくりする。

大学卒業時の歴研追出しコンパのとき、後輩たちのはなむけの寄書に、臨席頂いた先生も、「あかあかと一本のみち通りたり たまきわる我が命なりけり」（斎藤茂吉）と書いてくださった。これは先生ご自身の生き方、そのものであると思いつつ、筆者にもその覚悟をうながされたものと、緊張とうれしさで体が震えた。

先生が二〇一一年に長岡京市の文化功労賞をいただくだけ、お祝いの会があったとき、末席で祝辞を述べたことがある。そのとき聖書の「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」（ヨハネ伝第二章二四節）の言葉をひきながら、先生の人生は、この言葉のように、普通の人びとの現在と未来のために、献身の連続であった、という意味のことを申し述べた。

以前から、先生のご生涯は、恵まれた才能とお立場を、ご自分のためではなく、多くの人びとのために、惜しみなく費やされたもの、と思つていたから、この言葉は自然に出てきた。筆者もその一人として、ご指導いただけたことを、じつに

幸運であったと思う。

先生はいま、東福寺南谷の塔頭・正覚庵の樹木葬墓地（法洲苑）で眠っておられる。正覚庵は伊達家四代伊達正依が開基した寺である。ときおり仙台の思い出を語って下さったが、「お茶の井ヶ田」には、東北帝国大学の先生方が、大学の帰りに来店されることがあり、あるとき日本思想史で著名な村岡典嗣氏から、店頭の立ち話で、学問するなから京都に行けといわれた、と伺った記憶がある。仙台ゆかりの墓地というところに、京都で長い歲月を過ごされた先生にあっても、故郷への愛惜は格別なのだ、と改めて思い知らされた。

先生、本当にありがとうございます。仙台ゆかりの地で、やすらかにお休みください。

（元乙訓文化遺産を守る会会長、神戸大学名誉教授）

井ヶ田先生の思い出

浅田和成（古文書部会）

冠省 今年も師走 多事で変化の大きな年でした。来年は明るく成るのでしょうか。「八丁みそ」大好物なので有難うございました。……（後略）

井ヶ田良治

私は長らく大山崎町在住でしたが、現在は出身地の三河安城に住んでいます。十年ほど前、井ヶ田先生をはじめ古文書部会の皆さんを三河の歴史探訪に御案内したことがありました。帰りに岡崎の八丁味噌の工場に寄りましたが、その折、先生が八丁味噌を買われるのを見ていました。

三十年近く先生に古文書を教えていただいて、何もお礼することができず心苦しく思っていましたので、ささやかなお礼として、暮に八丁味噌をお送りしました。その折に冒頭の札状をいただきました。大事に私の宝物として私の机にしまっています。

のちに豊田市の郷土資料館に先生の甥御さん

の収集品の展示を見るために再度先生を御案内しました。その折に先生が八丁味噌を好まれるわけをうかがいました。すると、前に京都の料亭の主人と対談されたおり、味噌は、あわせ味噌が一番おいしいとの教示があつて、先生の故郷の仙台味噌と八丁味噌をブレンドするようになったとのことでした。三河人としては、うれしい限りでした。

また、その案内のお礼に先生の御著書『日本法社会史を拓く』（部落問題研究所）を頂戴しました。そこには

「今では、思想や精神的誇りでは飯は食えないといっているので、すべてが経済的効率主義の虜になつていますが、精神的内面的権威の復活なしには新しい日本の未来は開けのではありませんかという気がします」の一節があります。心していかなければと思います。

「浅田さん、学校は今大変ですか。今日はいつもより読めるようになりましたね。」私が勤めていた学校が暴力問題で新聞やテレビで報道されたことに心をいためていただいていたのでしよう。

感謝は、言葉としては言い尽せないのですが、今は先生の御冥福を心よりお祈り申しあげます。ありがとうございます。

もう少し、三河から古文書部会に通わせていただきます。



古文書部会 最前列 中央が 井ヶ田先生

脇田修先生 脇田晴子先生 を悼む

京樂真帆子

乙訓地域は、この二年の間にある二人の歴史研究者を失った。脇田晴子先生、二〇一六年九月二七日逝去。享年八二歳。脇田修先生、二〇一八年三月七日逝去。享年八六歳。日本中世史を専門とする晴子先生と、日本近世史を専門とする修先生は、日本史研究を牽引し続けた研究者夫妻であった。

修先生は、一九三一年に大阪府で生まれ、旧制北野中学校を四年で修了し、旧制大阪高等学校から京都大学文学部、そして大学院へと進学した。

晴子先生は、一九三四年に西宮で生まれ、大阪の北野高校、神戸大学文学部を卒業し、両親の猛反対を押し切って京都大学大学院へ進学し、そこで修先生と出会った。

「初めてのデートは東洋亭でした」と、晴子先生のお葬式で修先生はお話され、涙にくれていた参列者の微笑みを誘った。一方、晴子先生は、修士論文で中世近江の商業史に取り組みつもりだと研究室でのおしゃべりの時に言ったら、脇田修

さんが「ああ、僕は今堀も調査したことがあるから、付いて行ってあげる」と言ったから現地調査と一緒に行ったのだ、と語っていた（脇田晴子先生文化勲章授章記念講演会 私と滋賀、そして女性史研究「聞き手・京樂真帆子、『人間文化』（滋賀県立大学）第三〇号、二〇一二年）。東洋亭での会食と、今堀でのフィールドワークのどちらが先なのかはわからない。こうして大学の研究室で出会った二人は結婚し、一九六〇年に新居を京都府向日市寺戸に構えた。それから最晩年に神戸に移るまで、ずっと乙訓の住人であった。つまり、脇田先生夫妻の膨大な数の論文・著書、編著は、ここ乙訓で構想され、練られ、書き上げられたものである（厳密には、大学の研究室や信州の別荘などで執筆されたものもあるだろう）。

晴子先生は、『日本中世商業発達史の研究』（御茶の水書房、一九六九年）をはじめ、『日本中世都市論』（東京大学出版会、一九八一年）などの都市論、『日本中世女性史の研究』（東京大学出版会、一九九二年）といった女性史・ジェンダー史研究、『女性芸能者の源流』（角川書店、二〇〇一年）、『日本中世被差別民の研究』（岩波書店、二〇〇二年）、『天皇と中世文化』（吉川弘文館、二〇〇三年）といった、芸能史・身分制論・天皇制論など多彩な研究成果を世に問われた。その功績を認められ、

二〇〇五年に文化功労者、二〇一〇年に文化勲章を受章した。教育者としても、橘女子大学（現、京都橘大学）、鳴門教育大学、大阪外国語大学（現、大阪大学）、滋賀県立大学などで教鞭を執り、後進の指導に当たった。海外の研究者との交流も深く、晴子先生の教えを受けた研究者は世界で活躍している。

ただ、晴子先生が「これが最後の仕事」だと、準備しておられた通史『日本女性史』が完成しなかったことが残念である。なお、この本の構成は、「脇田晴子氏遺稿…『仮』日本女性史』目次」として、『女性史学』第二七号（二〇一七年）に掲載されている。

修先生は、『近世封建社会の経済構造』（御茶の水書房、一九六三年）をはじめ、都市史（『近世大坂の町と人』人文書院、一九八六年など）や部落史（『近世身分制と被差別部落』部落問題研究所、二〇〇一年など）などの視点から史料を読み解く近世史を専門とし、「太閤さん」つまり豊臣秀吉を独自の視点で再評価された（『秀吉の経済感覚 経済を武器とした天下人』中公新書、一九九一年など）。修先生が組み立てた、織田信長は“中世”に留まるが、秀吉は“近世”を生み出した、とする議論は、今もわれわれの研究の前提となっている。わかりやすい文章で大坂の町人文化を豊かに描き

上げた著作の数々は、研究者のみならず多くの歴史ファンを魅了した。龍谷大学文学部助教授を経て、一九六八年に大阪大学文学部助教授に就任し、以後定年を迎える一九九四年まで大阪大学で教育にあたり、多くの研究者を育てた。途中、文学部長を務められ、篤い人望を背景に、管理職の遂行能力も発揮された。のちに、大阪大学出版会会長、大阪市文化財協会会長、大阪歴史博物館館長といった「長」を歴任されることになる。

今、あらためてお二人の著作を取り出してみると、それぞれの本の「あとがき」で、お互いに謝辞を述べ合っている文章が、研究者夫婦のありかたの一つを示していて微笑ましい。

乙訓の地域史研究に対しては、修先生が大きく貢献された。『向日市史』（下巻、一九八五年）では、編集担当者の一人となり、「第一章 近世社会の成立」を執筆された。これは、信長入洛や物集女氏滅亡といった著名な事件から書き起こし、近世領主による地域支配の実像を明らかにし、さらに、向日町に生きる人々の生活を描き出すという、地域史研究のお手本となるような文章である。

修先生、晴子先生の共同執筆といえば、『物語京都の歴史 花の都の二千年』（中公新書、二〇〇八年）がまずは思い浮かぶが、ここでは、乙訓に関するものとして、『京都新聞』に連載された「乙訓

に暮らして 歴史家夫妻の往復書簡」(二〇一一年一月八日〜一〇月一日 毎月二回土曜日掲載、全一九回)を挙げたい。修先生からの往便(奇数回)での問いかけに、晴子先生が応える(偶数回)という形式の記事である。その一部を紹介すると、「①向日町とのご縁」、「②文書そのままの現場に」で乙訓の概要を説明し、「⑦信長入洛と乙訓」、「⑧乙訓の国人たち」で乙訓ならではの歴史が語られる。さらに、「⑪長岡京跡の発見」で古代史にも目配りし、「⑭村落の宗教的結合」で筆は民俗芸能にも及ぶ。博覧強記のお二人ならではの企画であり、お二人の声が聞こえて来るような平易な文章によって、乙訓の歴史への関心がさらにかきたてられる。

第一九回は「秀吉、利休、そして待庵」というタイトルで、「中世の文化に詳しい晴子さんは、利休らの茶の湯が秀吉の天下統一に果たした役割をどう考えますか。」との修先生の問いかけで終わっている。この質問に対する晴子先生の応答を読みたかった、と今しみじみと思う。

最後に、個人的な思い出を披露することを許されたい。

同じ分野の研究者と結婚したわたしにとって、脇田先生夫妻は目指すべきロールモデルであった。わたしの結婚披露宴で「研究者同士で結婚するな

んで！」と厳しくも愛に満ちた祝辞を述べた指導教員の一人を睨みつけてくれたのは、晴子先生である（そのA先生が思わず洩らした「あ、しまった・・・」という一言をマイクが拾い、テーブルコーダーに記録されている）。晴子先生は、ことある毎に「研究者同士の生活は、自分の研究時間の確保が大きな課題で、日々が戦いである」と教えて下さった。「家事は手抜きをしても、研究時間をひねり出せ」とのアドバイスも受けた。とはいえ、ローストビーフや粕汁など、晴子先生がふるまう手料理は、決して手抜きではなく、とても美味しかった。脇田先生ご夫妻は、家事を知人に委託するとともに、きちんと分担もなさっていたらしい。実際、脇田先生のお宅での研究会の時、台所で修先生が食後の皿洗いをしておられる姿を何度も目撃した（その様子をしっかりと聞かされたからか、わたしの夫は、皿洗いは出来る）。

晴子先生は、悩み苦しむ女性研究者たちを鼓舞してこられた。なかでも、「自分の研究をみんなが理解してくれなくても、落ち込むことはない。簡単に理解される研究は、すぐに古びてしまう。新しい、意義ある研究は、そう易々とみんなに理解されるものではない」という言葉は、歴大な研究蓄積に立ち向かって悪戦苦闘する若手の励みになるものだった。脇田先生の自宅で開催される勉強

会は、わたしたちにとつて、もう一つの学びの場であった。阪急東向日駅から脇田邸に向かって西国街道の坂を上っていく道、あるいは、長岡京市の自宅から自転車で向かう途中の五辻の景色も、懐かしく思い出される。

晩年、晴子先生の記憶が混乱し始めた頃、わたしを院生と勘違いなさった晴子先生は、「勉強するのよ、とにかく、勉強するのよ」と力を込めておっしゃった。大学での業務に追われていたわたしの心に、この言葉は突き刺さった。学部長など様々な「長」の職を全うしながらも、研究の手を緩めなかつた修先生をも見習わねばならないと、身の引き締まる思いがした。

また、さらに病状が進んでから、わたしが論文の抜き刷りをお持ちした時、修先生が「晴子に渡してごらん」とおっしゃった。わたしが晴子先生の手元にそっと置いたら、無言のまま、動かぬ右手で冊子を押さえ、動く左手で順番に頁をめくり始められた。目は、文字を追っているわけではない。しかし、手の動き、それは、文献史学研究者が、史料を一枚一枚繰っていく姿だった。わたしは、「ああ、研究は身体化するのだ」と感動したのだった。

向日市寺戸のご自宅は、大きな書庫を備えた一九六〇年ならではの味のある建築で、庭の木々も

手入れが行き届いていた（修先生が庭木の剪定をなさる姿を拝見したことがある）。何が理由だったかは忘れたが、一度（たった一度である）、晴子先生にきつく叱られたわたしが泣くしかなかった時、修先生が様子を見に来て、そっと帰らせて下さったあの部屋も、あの建物も、今はもうない。長岡京の京域内に当たり、また、西国街道に近いあの土地は、いずれ発掘調査がなされるであろう。どういう遺跡や遺物が出て来るか、歴史研究者としては楽しみである。しかし、その成果を知れば一番喜ばれたであろう脇田先生ご夫妻がもうおられない、ということが悲しい。

心から、お二人の御冥福をお祈りいたします。
（滋賀県立大学 教授）



脇田先生ご夫妻（写真提供 脇田成さま）

湯浅克二さんの思いで

長谷川澄夫

湯浅克二さんの訃報を聞いたのは、亡くなって暫くしてのことである。梅ヶ丘のお宅に電話して息子さんとながり、晩年の様子をお窺いすることができた。奥さんが亡くなり、息子さんも家を離れられており、先年体調を崩されてからは、自由な独り暮らしであったようである。

湯浅さんは守る会の創立時のよびかけ人の一人で、著名な方々のなかに「若者代表」のような立ち位置でその名が記されている。守る会と言え、つとに長岡京発掘の顔としての中山修一先生や事務局長の小林清先生の活躍があげられる。歴史の専門でない湯浅さんを覚えている人は今は少なくなつたが、創立当初の会誌『乙訓文化遺産』・会報『乙訓文化』の編集を、小林さんを扶けて一手にひきうけ、紙面の割り付けや表紙のイラストを描き、印刷所への往復などの裏方を引き受けていたのが湯浅さんだったと思う。

守る会の青少年のつどう「日曜部会」では、ちよつと年上であり、歴史といつても「発掘」とは

直接かかわってないからか、「わが道を行く」タイプだったかもしれない。

そのころ湯浅さん長岡京の「三菱製紙（さんかみと言っていた）」に勤めていたが、合理化や労働条件などをめぐって、はげしい労働争議のなか、湯浅さんもその一員として活躍されていた。闘いの一環として巾ひろい市民運動とむすんだとくみとして、文化運動との連携が模索されていた頃でもあった。湯浅さんが「守る会」の創立メンバーのひとりになを連ねているのは、そんな背景があったと思う（詳しい話を聞いておけばよかったのだが）。

岡山県真庭市目木

西口地区文書調査

古文書部会

中国山地のほぼ中央に位置する岡山県真庭市は、2005年（平成17）に9町村が合併して誕生した比較的新しい市です。市役所が置かれている旧久世町域に大字目木地区西口集落があります。



西口地区遠景

先年に退職され、この地に帰郷された「乙文」会員の中尾さんから、これを機に、地区に伝わる古文書を整理したいので協力してほしい旨、古文書部会に依頼がありました。

そこで、昨2018年8月末に同人7人が現地西口を訪ね、二日にわたって文書の調査をしました。中尾さんの「近くに湯原温泉がありました」もインセンティブとなったのは無論です。

西口文書は、江戸期から昭和30年代まで180余年間にわたるもので、およそ50点。「緊要書類 米来村」と表書きされた桐箱に収められてあり、文書の他に、帳簿、手帳、預金通帳、各種領収証など

も含まれていました。

中尾さんが事前に分類されていたので、調査としてはそれに沿い各文書の作成年、内容、差出人と受取人などを書き出し、短い文書はその場で翻刻す



ることでした。

土地柄、江戸期の文書は木材、秣（まぐさ）、柴、肥料としての落ち葉などを調達する山間入会地（いりあいち）Ⅱ共有地Ⅱを巡る他村との紛争、つまり山論（さんろん）関係のものが多いと、例えれば、

① 『乍恐奉御訴訟候事』（訴訟方）目木村半左衛門

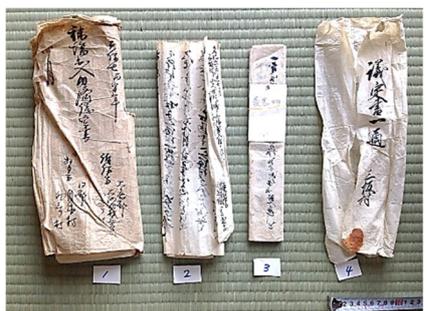
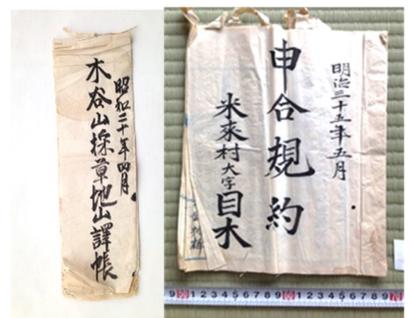
他一名、（相手）上河内村庄蔵他一名、内容は「肥原山拝領取出入」（天保五年）

② 『乍恐奉指上返答書』目木村庄屋良右衛門ほかから久世御役所宛て、内容は「組合十四ヶ村肥柴草刈口明の件」（安永六年）

③ 『出入済口証文之事』作州大庭郡山久世村年寄与三次、百姓代又右衛門、庄屋富太郎から久世御役所宛て「三坂村より山久世村ニ掛り山論済口証文写」（文化六年）、

に見られるように訴状、反論、済状Ⅱ解決の確認書Ⅱなどです。

明治以降の書類は、係争にかかわるものは無く、共有地に関する村内の申し合わせや、地図などが目立ちます



が、山の草取り場所などの入会地に触れた文書は昭和20年代まで続きます。推測ですが、当時の農林業にとって貴重な動力であった牛馬の餌の確保は、村民の重大な関心事であったのでしよう。

それ以後は、地区の土木工事の費用についての書類などになり、これらは現代史資料であるので特別な読解力は不要、私たち古文書部会メンバーは用なしです。

同人の長谷川さんは、乙文現代史部会をも主宰されているので、興味があるのでしようけれど、ところで、昭和29年に『請書』という文書があつて、これは西口地区代表者が村から松茸採り権利の払い下げを受けた契約書で、その金額はなんと100円でした！

当時このあたりで松茸は二束三文だったと

いう証しであります。

また、久世の西隣、中国勝山の古い町並みと造り酒屋の景観、湯原温泉の泉質もついでに調査しておきましたが、良好でした。

(古文書部会 井上喜雄)



調査参加の古文書部会メンバー

書籍紹介

『三宅安兵衛遺志碑』

(二〇一八年)

むこうまち歴史サークル石造物班

三宅安兵衛遺志碑（以下、遺志碑）とは、京都で織物商を営んだ三宅安兵衛の息清治郎が、父の遺志に基づいて京都市から南山城にかけての名所旧跡に建碑したものである。建碑の時期は大正一〇年から昭和五年までの一〇年にわたり、その数は四〇〇基近くにのぼる。

遺志碑は、近代における史蹟認識を考えるうえでも貴重な史料で、中村武生「京都三宅安兵衛・清治郎父子建立碑とその分布」『花園史学』第二二号、二〇〇一年）にその概要はすでに提示されていたが、遺志碑の全てが完全に把握されているわけではなかった。しかも、中村論文が発表されるから一〇年以上が経過しているが、遺志碑がその後にも再確認されることもあまりなかった。

こうした現状を踏まえて、遺志碑の「現在」を把握するという目的のもと編まれたのが本書とな

る。本書には、把握できた遺志碑が全てカラー写真で掲載され、それぞれの所在地・建立年・寸法・碑文などの情報も付されている。ゆえに、現地を訪ねる際には極めて有益な手引き書となるであろう。と同時に、遺志碑は比較的新しいこともあって文化財として認識されることもあまりないため、現状を可能な限り把握した本書は、保存への意識高揚を図るうえでも少なからぬ意義のあるものと思われる。

惜しむらくは、遺志碑の所在を明示した地図が部分的にしか付随していないことである。所在を明示しておくことは、現地を訪ねる際の手引きという観点だけでなく、文化財保存の観点からも有効なではなからうか。

かくいう私も、かねてより遺志碑に関心を寄せており、多くを目にしてきたつもりである。ところが、このたび一書にまとめられたものを通覧すると、新たな気付きがいろいろと出てきた。その最たるは、必ずしも画一的ではなく、思いのほかバラエティーに富んでいるということである。それゆえに、せっかくこれだけの史料を収集したのであれば、ただ並べるだけでなく、分類をするなり、多少の考察は欲しかった。

とはいえ、本書が多くの労力に裏打ちされた遺志碑の有益な手引き書であることには変わりがない。

い。しかも驚くべきは、七〇歳を超えるメンバーが二〇一五年から作業を始めて、わずか三年で刊行に漕ぎ着けたということである。そのバイタリティーには敬意を表したい。そして、そのバイタリティーがあれば、まだ見つかっていない遺志碑とともに、地図や考察なども加えた補遺編が改めて刊行されるのではないかと、つい期待してしまうのである。

(大阪大谷大学准教授 馬部隆弘)

乙訓文化 90号

発行日 2019年(平成31)年3月23日

発行所 乙訓の文化遺産を守る会

事務局 長谷川澄夫 方

〒617-0002 京都府向日市寺戸町西野辺8

TEL075-921-2054 / HP (<http://otubun.org>)

振替番号 0099008130084

年間会費 2000円